アメリカを震撼する暴力－私達は何をすべきか

私はアメリカで生活しているということを幸運に思っています。美しい場所や良き人々に恵まれた素晴らしい国です。しかし、最近は約一ヶ月の間、この国を根底から蝕むような悲劇が連続して起きています。

五月十四日、トップス・スーパーマーケットで食料品を買いに来たアフリカ系アメリカ人の方々が十人も殺害される事件が起きました。十八歳の白人の男が二百マイル以上もの距離を運転し、ニューヨーク州の東バッファローにあるそのマーケットを標的にしたのです。なぜなら、そのマーケットは客の大部分が黒人層であったからです。

事件の翌日、カリフォルニア州オレンジ郡にある台湾系のキリスト教教会に銃を持った一人の男が入り、参拝者の中に紛れ込みました。そして男が銃を人々に向けたその時、その様子を見て取り押さえようとしたジョン・チェン医師が銃弾の犠牲となってしまいました。チェン医師は教会に出席していた母親も含め、自らの命をもって皆を救ったのです。

さらに五月二十四日、テキサス州ユヴァルディにあるロブ小学校にて新たな悲劇が起きてしまいました。銃で武装した十八歳の男が学校に入り、十九人の四年生の生徒達と二人の先生を殺害したのです。前途ある罪なき子供達と熱心な教育者であった先生方が、何の理由もなくただ命を奪われたのです。

何の甲斐のないことかもしれませんが、銃により引き起こされた悲劇の犠牲となった全ての方々、特に子供達のご家族、ご友人の皆様に心よりお悔やみを申し上げます。悲しい事ですが、私達の国の学校では、従来の地震や火事の避難訓練に加え、銃撃犯を想定した避難訓練も行われるようになっているのです。

アメリカは国民に銃を所持し、武装する権利を与えている国です。しかし、多くの人が言っているように、軍事使用を想定して作られた連続射撃が可能な武器が、間違った目的を持つ人々の手に多く渡ってしまっているのです。私から見れば、そのような武器を所持する権利などありはしないのです。

国民の誰もが友人として、互いのために尽くすことができるような国を望んでいるのはきっと私達だけではないはずです。キリスト教徒も、ユダヤ教徒も、イスラム教徒も皆同じことを望んでいるのです。事件後の記者会見でテキサス州のダン・パトリック氏副知事がこのような言葉で会見を締め括りました。「どうか皆さんのお知恵をお貸し下さい」と。何故このような事件が起きたのか、納得できる答えを見つける知恵などおそらくないでしょう。しかし、仏教でいう智慧は、現在の我が国に最も欠けているものなのです。

何年も前のことですが、『ボウリング・フォー・コロンバイン』というドキュメンタリー映画を見ました。一九九九年四月にコロラド州のコロンバイン高校で起きた悲劇を題材にした、マイケル・ムーア監督制作の映画です。十三人もの高校生が犠牲になった事件です。その映画

で語られていたことの一つは、カナダにおいては国民一人当たりの銃器の数が、米国の数よりも多いという事です。それにもかかわらず、カナダで発生する銃撃事件は米国の事件に比べるとはるかに少ないのです。映画館を出る時、カナダに引っ越したいとさえ思いました。日本もアメリカに比べると非常に安全です。銃の所持に対する規制が厳しいからです。もちろん犯罪はどのような場所でも起きます。しかし、銃がなければ、アメリカで発生する事件よりもその頻度や深刻性ははるかに低いものとなります。新型コロナウィルスの問題もまだ終わっていませんが、暴力の問題が私達にとって大きなものとなり続けているのです。

私達は縁のある人々との友好な関係を育むため、力を尽くすことができます。困っている人がいれば、できる限りのことをして助けることができます。そして、これはあまりにも大きな目標ではありますが、教えを実践し、全ての人にとって良き世界を作り上げ、武器や戦争が不要なものとなるようにしていかねばなりません。これは仏教、そしてあらゆる宗教にとっての願いなのです。希望を持って生き、幸せを互いに分かち合う事ができるということは、恐怖に慄いて生きねばならないということよりもはるかに素晴らしいことなのです。ウクライナの人々の痛み、苦しみを思うと心が痛むばかりです。一日も早く戦争が終結し、彼らが平和と幸せな生活を取り戻すことができることを願っております。

私達の人生は様々な困難に満ちておりますが、その中においても私達自身や縁のある人々の人生を少しでも幸福にし、意義あるものにすることはできます。これからも仏法に道を尋ねつつ、歩み続けて参りましょう。

2022 年 6 月 5 日

真宗大谷派
北米開教監督部　開教監督
東本願寺ロサンゼルス別院　輪番
伊　東　憲　昭